

最初から漢字で

「ひとりでに覚えた」漢字は、「ひとりでに使えるやうになる」といふ特徴を有つ。実は、「ひとりでに使えるやうになる」からこそ一生涯忘れることが無いのであって、いくらひとりでに覚えたものでも、その後使ふ機会が無かったら忘れてしまふに決つてゐる。ただ、ひとりでに覚えたものは、ひとりでに使ふものだから、使ふことによってその記憶が保持されるのである。

今の学校教育では、「テストすれば書ける漢字が、作文やノートには少しも使はれない」といふ事をよく先生方から聞く。「書けと言はれた時には立派に書けるのに、さうでない場合には“かな書き”して、漢字で書かない」のである。その理由は一体どこにあるのであろうか。

それは「覚えようと努力して覚えた漢字だから」である。私たちが努力して覚えた英語は、考へなければ口から出て来たいやうに、努力して覚えた漢字は、特に「書かう」と意識しなければ書けないのである。それで、作文やノートには、書けば書ける漢字を使はないで、初めから使ひなれてゐる“かな”で書くのである。漢字を使へば漢字を使ふ能力が発達するけれども、このやうに使はないであると、折角覚えた漢字も忘れられてしまふ。これが、今の学校における漢字教育が成功しない理

由である。

かういふ失敗を無くすためには、幼児期に初めから漢字を目に触れさせることが是非必要である。そのためには“がっこう”といふやうな、この社会に実際に使はれない表記を教へることを即刻廃止することが必要である。初めから“学校”といふ本物で教へて置きさへすれば、子供は決して“がっこう”などとかな書きすることは無い。初めに“がっこう”と教へるから、“学校”を習つた後でも初めに習つた“がっこう”がひとりに出て来るのである。そのため、漢字がなかなか身につかない、といふ事は先に述べた通りである。

初めから本物で“学校”と教へて置けば、何も問題は起らないのである。その事は、私が昭和二十八年から三年間にわたる実践指導で既に証明済みである。世に“石井方式”といふ言葉が使はれるやうになって久しいが、石井方式とは、「初めから“学校”といふやうに本物の表記を用ひ、“がっこう”といふにせ表記は絶対に用ひないこと」を主張したものである。

昭和四十一年三月四日の朝日新聞は、社説に「石井方式を考へる」といふ論文を掲げ、「最初から本物の表記を教へる石井方式を考へてみる必要があるのではないかと、広く世に問ひ掛けてくれたものであったが、それに応ずる声は遂に起らなかった。

明治以来、学校教育では、総て「かなを学び終へてから漢字へ」といふ方針が金科玉条とされてゐて、国民全休がその教育を受けて育つて来たものであるから、皆その弊害を受けてゐるのにも関はず、その弊害に気が付かないのである。だから、私がいくらその弊害を説明しても理解できないのである。

また、稀にその弊害に気が付いた人がゐたとしても、教育の世界は、旧を守つてゐればそれで済む所である。いや、済むといふよりも、旧を守つてゐた方が平穩無事な世界なのである。だから、教育界は、教育者だけに任せてゐたら、改革は永遠に出来ないだらうと私は思ふ。

「赤信号、皆で渡れば恐くない」といふのは、日本人の一般的な傾向であるが、教育界はとりわけその傾向が著しい世界である。だから、「青信号になつてゐても、決して一人では渡らうとしない」といふのが、わが国の教育界においては常識のやうに思はれる。

実に実に残念な事であるが、ここが教育界と科学や実業の世界との違ふ所である。教育は、科学や実業のやうには結果が直に現れない。また、現れても、その原因が複雑に絡み合つてゐるので、判断が極めて難しい。だから、結果が悪くても、責任をいくらでもよそに転嫁できる。それが一層教育界の保守性を強めてゐる原因であつて、それで私は「改革は永遠に出来ない」と思ふわけである。

だから、「真の教育改革は、大衆がその必要を痛感しない限り、出来ないであらう」と私は考へてゐる。と言っても大した事をする必要はない。人々が皆、「王様は裸かだ」と思つたら、誰に気兼ねなく「王様は裸かだ」といふやうに、教育問題についても、感じたままを率直に、声を大にして言へばよいのである。

“がっこう”は偽物だ。子供には偽物を教へないで、本物の“学校”を教へよ」と、人々が口をそろへて言つてくれたら今の学校教育も簡単に改まるものと私は確信してゐる。私はいつその日が来るか、旱天に慈雨を求めるやうな気持で切に待ち望むものである。